

# 掘りday はちのへ

—八戸市埋蔵文化財ニュース 第3号—



特殊泥炭層から遺物が出土した状態（多くの樹木の間から土器や木製品などが出土しました）

## 是川中居遺跡の本格的な発掘はじまる

平成11年7月、八戸市民にとって長年の夢とされてきた是川中居遺跡の発掘調査スタートしました。

調査により、厚さ約2メートルの特殊泥炭層

から、約3千年前のいろいろな遺物が大量に発見され想像した以上に保存状態が良好であることが確かめられました。調査は平成12年度以降も継続されます。

## 是川中居遺跡（これかわなかい）

是川遺跡が全国的に有名なのは、今から約3千年前の縄文晩期の高い工芸技術を誇る遺物が大量に出土しているからです。

東北地方の縄文晩期は、早くから発掘された遺跡の名前に因んで「亀ヶ岡文化」と呼ばれています。亀ヶ岡文化のいろいろな遺物が、最も揃った状態で展示されているのは、全国でも是川が一番でしょう。

ところが、是川遺跡には遺物は大量にありますが、縄文時代の生活を復元し整備しようと考えた時、その手がかりが不足しているのです。

平成11年度は、是川遺跡を整備するため発掘調査が本格的に開始された記念すべき年です。

調査は7月13日から行われましたが、ここでは中居遺跡のなかで南側のC区と呼ばれる地点の成果を紹介します。

トチ・クルミを主体とする特殊泥炭層が、厚さ2メートルにもわたって堆積しており、出土したトチの殻は漆黒に輝き、近くからアクではないかと思われる茶色の液体が滲んで出ていました。あまりに生々しく木の実が残っているものですから縄文晩期（今から3千年前）のものとはとても思えないほどでした。

特殊泥炭層からは、樹木の幹や枝・根などに混じって土器や石器・木製品が多数出土しました。特に赤漆が塗られた木製品の色は極めて鮮やかな朱色を呈するものが多くみられました。

クルミは、現代のものよりも大きなものが多く、大きな木の実を付ける木が大切に保護されたり、施肥なども行われていたのではないかとこの疑問が湧いてきます。

骨の保存状態も良好で、シカ・イノシシなど陸獣のほかにサメ・スズキなど魚骨も含まれていました。是川の縄文人が海まで出かけ漁を行ったものか、海辺の遺跡と食べ物を交換したのか今後研究する必要があります。

現在、ニワトコ・サンショ・ヤマブドウなど微細な植物種子の選別作業を行っており、木製

品などの樹種鑑定も以来中です。これらが完了すると、是川遺跡の植物利用の実態が飛躍的に明らかになるものと期待されます。

今回の調査で解明できたこともありますが、新たに生じた疑問の方がはるかに多く、限られた紙面で全てを伝えることはとてもできません。

是川遺跡の調査を通し「最後の縄文文化像」解明にどこまで迫れるかこれからの正念場になりそうです。（工藤 竹久）



厚い土の断面に土器や獣骨などが顔を出している状態



注口土器が出土した状態      クルミの大きさの違い  
(上段-是川遺跡、下段-現代のもの)



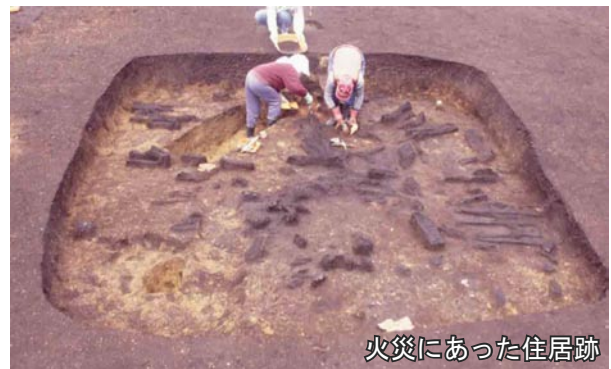
木の皮を巻き赤漆で飾られた弓(?)の一部



## 酒美平遺跡（さかみたい）

酒美平遺跡は、市街地の南西部に位置し、八戸高専及び聖ウルスラ学院の南側に広がっています。平成7・8年の2ヶ年で、都市計画道路建設に伴う発掘調査が行われています。古代（約1,300年前）の竪穴住居跡や掘立柱建物跡がみつかりました。今回の調査は、同じ道路の延長部分にあたります。前回の調査同様に古代の遺構を確認しました。とくに南向きの緩やかな斜面の低い方からは、縄文時代前期・後期の住居跡や中世の出入口をもつ竪穴建物跡もみつっています。その中でも1軒の宅地跡部分（約100坪）からは、多くの遺構が発見されました（下の写真）。縄文時代後期の竪穴住居跡3棟、古代の竪穴住居跡4棟・円形周溝1基、中世の竪穴建物跡1棟と、それぞれ時代は違いますが、昔の人々の暮らした家の跡がみつかりました。遺跡の南側は沢になっています。沢に近い南向きの斜面は、いつの時代も住みやすい環境であったことが想像されます。古代の竪穴住居跡は、前回の調査分を含めると16棟が確認されました。カマドは、すべて北側につくられています。今回の調査では、火災にあった竪穴住居が2棟ありまし

た。住居に使われた部材が、炭化した状態でみつかりました。その木の種類を調べるため、炭化材を鑑定に出したところ大部分がブナ科の木で一部にケヤキが使われていたことがわかりました。

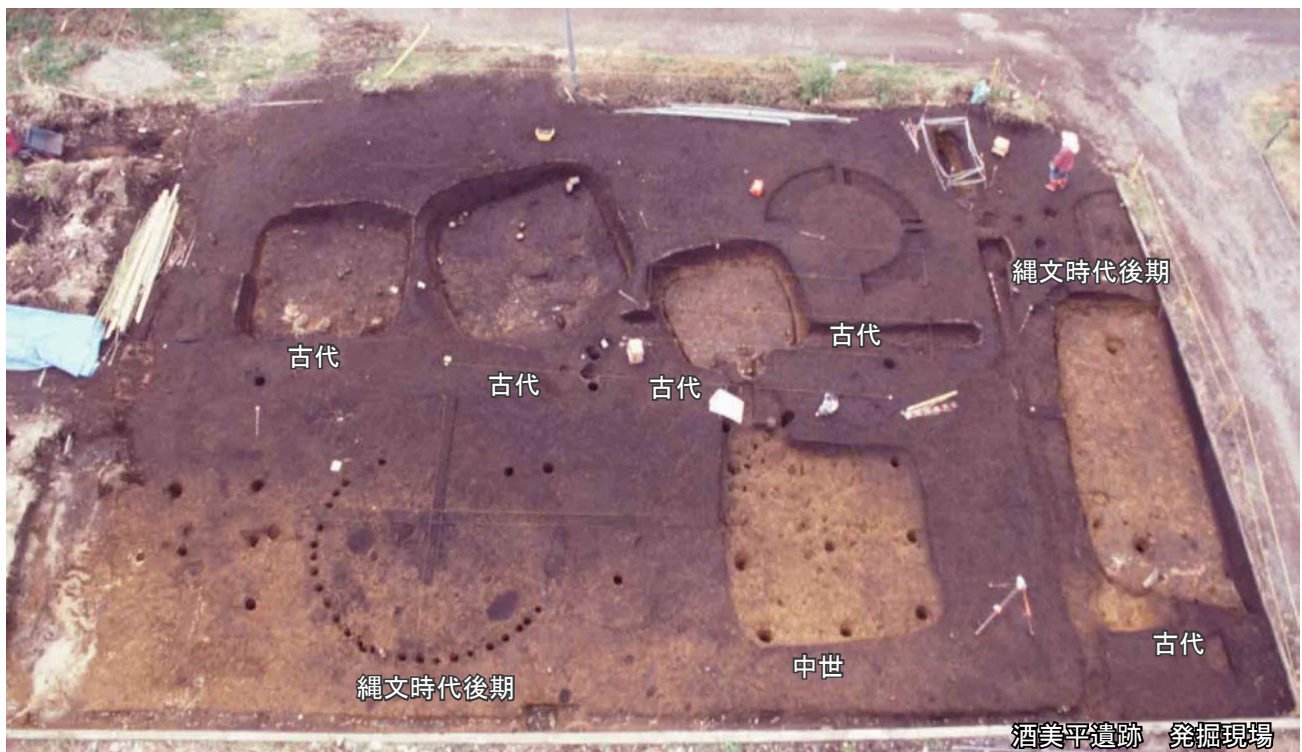


酒美平遺跡は、八戸高専の東側に広がる田面木遺跡に隣接しており、両遺跡で7世紀後半から8世紀前半ころの集落がみつっています。

周辺の同時期の遺跡として、丹後平古墳があります。丹後平古墳は、末期古墳<sup>(註)</sup>と呼ばれる群集するお墓です。酒美平・田面木遺跡の集落で生活した人々が、その墓に埋葬された可能性も考えられます。

（大野 亨）

注）末期古墳とは、東北部から北海道にかけて7～9世紀頃につくられた円墳。



# 縄文時代の時期と土器編年

縄文時代とは、一般的に縄目が施された土器を使用していた時代のことを言います。これは今から約13,000年前に始まり、約2,300年前に終了したと考えられています。その期間は10,700年。江戸時代でも約270年足らずなので、縄文時代の長さは計り知れないものがあります。

そこで縄文土器の編年研究の成果をもとに、現在、縄文時代を草創期(13,000～10,000年前)・早期(10,000～6,000年前)・前期(6,000～5,000年前)・中期(6,000～5,000年前)・後期(4,000～3,000年前)・晩期(3,000～2,300年前)の6時期に区分されています。

縄文土器も土器の形や文様から時期別に分類することができます。私たちが現在使用している食器や生活用具等も、2～300年もすれば、昭和・平成時代の遺物として研究の対象になっているかも知れません。

青森県内で縄文土器は約50型式に細分されています。単純計算をすれば、1型式約200年になります。発掘調査が本格的に行われるようになってからまだ30年余り、まだまだこの間を埋めるような土器型式が設定されるのは確実ですし、

型式の新旧が逆転する場合があります。また、他地域では(県外)他地域なりの土器の型式設定がされています。それは方言(訛り)と同じで、文様の共通性が認められても、その地域なりの特徴の違いが土器にみられるからです。

次に、型式名の設定の仕方ですが、遺跡の名前を用いるのが一般的です。例えば、遺跡を調査してこれまで知られていなかった特徴をもつ一群の土器が出土し、それを発表すれば型式名が成り立ちます。但し、それを認めるか認めないかは、他の考古学の研究者が決めることです。唯一、土器の形から型式を設定したものに、縄文時代前期・中期の円筒上層式・下層式があります。それは字のごとく円筒形の土器で、文様構成に基づき細分されています。

以下に、縄文時代の時期区分と青森県内の土器型式名、八戸市内の代表的な遺跡等を表にまとめてみました。次回からは、縄文時代草創期(八戸市内で最も古い時代の遺跡)から順を追って写真・図版をまじえながら説明をしていきたいと思っています。(村木 淳)

## 縄文時代草創期

11000BC～8000BC(13000～10000年前)

形式名	遺跡名	備考
(無文土器)		長者久保遺跡(東北町)
(隆線文系土器)		表館(1)遺跡(六ヶ所村)
(爪形文系土器)	鴨平(2)	
(多縄文系土器)	櫛引	

## 縄文時代早期

8000BC～4000BC(10000～6000年前)

形式名	遺跡名	備考
日計式(八戸市)	見立山(2)	
白浜式(八戸市)	牛ヶ沢(4)	
根井沼式(三沢市)	牛ヶ沢(4)	
寺の沢式(三戸町)	館平	8600±180(南部浮石層)
吹切沢式(東通村)	牛ヶ沢(4)	
鳥木沢式(八戸市)	鳥木沢	
物見台式(東通村)	田面木平(1)	
ムシリI式(東通村)	売場	
赤御堂古段階(八戸市)	赤御堂	
赤御堂式(八戸市)	長七谷地貝塚	
赤御堂新段階(八戸市)	長七谷地2号	
早稲田5類(三沢市)	新井田古館	
表館IX群(六ヶ所村)	見立山(2)	

## 縄文時代前期

4000BC～3000BC(6000～5000年前)

形式名	遺跡名	備考
表館X群(六ヶ所村)	見立山(2)	
長七谷地III群(八戸市)	長七谷地貝塚	
早稲田6類(三沢市)	和野前山	
表館式(六ヶ所村)		表館(六ヶ所村)
深郷田式(中里町)		赤沼下平(十和田市) 5390±140(中微浮石層)
円筒下層式		
a式	一王寺	
b式	牛ヶ沢(4)	
c式	一王子	
d1式	蟹沢	
d2式	蟹沢	

## 縄文時代中期

3000BC～2000BC(5000～4000年前)

形式名	遺跡名	備考
円筒上層式		
a式	笹ノ沢(3)	
b式	牛ヶ沢(4)	
c式	西長根・松ヶ崎	
d式	石手洗	ピラミッド時代(エジプト)
e式	西長根・松ヶ崎	
榎林式・大木8b式(天間林村)(宮城県七ヶ浜町)	西長根・松ヶ崎	
最花式・大木9式(むつ市)	西長根・松ヶ崎	
大木10式	田面木平(1)	

## 縄文時代後期

2000BC～1000BC(4000～3000年前)

形式名	遺跡名	備考
牛ヶ沢式(八戸市)	丹後谷地	
沖附式(六ヶ所村)	田面木平(1)	ハンムラビ法典(メソポタミア)
弥栄平式(六ヶ所村)	牛ヶ沢(4)	
十腰内式(弘前市)		
I式	丹後谷地	
II式	酒美平	甲骨文字(中国)
III式	風張(1)	
IV式	風張(1)	ツタンカーメン(エジプト)
V式	風張(1)	
(滝端)		滝端遺跡(階上)

## 縄文時代晩期

1000BC～300BC(3000～2300年前)

形式名	遺跡名	備考
大洞	B式	中居
	BC式	中居
	C1式	中居
	C2式	中居
	A式	一王寺(1)
	A'式	シャカ(インド)、孔子(中国)ソクラテス、プラトン(ギリシャ)パルテノン神殿(ギリシャ)剣吉荒町遺跡(名川町)アレキサンダー大王(ギリシャ)

## 市子林（いちこばやし）遺跡から出土した北大式土器

東北地方北部の古墳時代は空白の時代といわれ、遺跡の数も遺物の量も非常に少ない。平成11年10月、八戸市の市街地南東にある市子林遺跡から、北大式（ほくだいしき）と呼ばれる土器が3点出土した。この土器は、北海道を中心に分布し、古墳時代に相当する5～6世紀頃のものと考えられている。東北地方においては、およそ20箇所の遺跡から出土しているが、その性格はまだ明らかではない。

市子林遺跡は、新井田川の支流である松館川の右岸に位置し、近くには中世にお城が築かれたとされる、館平遺跡と新井田古館遺跡があります。これらの遺跡からは、古代の住居跡が多数見つかりましたので、新井田川をのぞむこの一帯に、お城が作られる前から、大変大きな古代の集落が広がっていたと考えられます。今回発見された北大式土器は、竪穴式の住居跡（9世紀後半）の堆積土から出土しました。とても小さな破片で、ばらばらに見つかったことから、住居と関係するものとは考えられません。残念なことに、これらの土器は、住居が作られたために、本来あった位置と形を失っています。

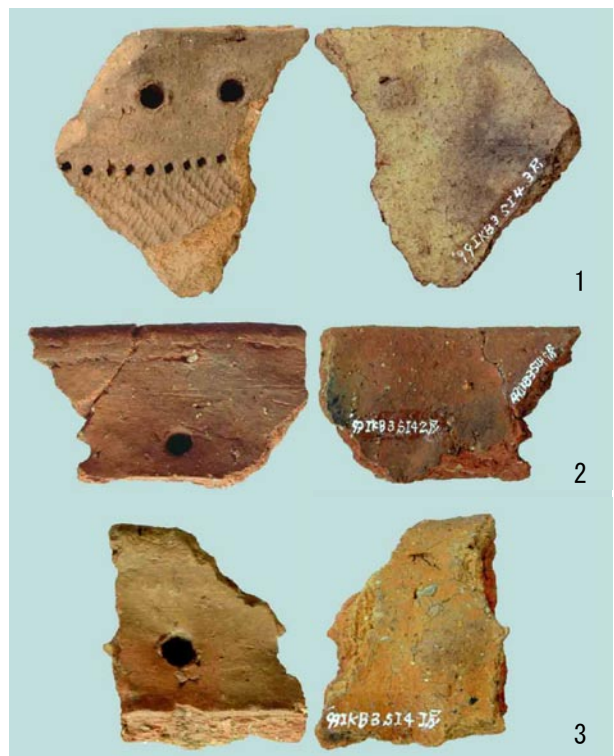
北大式土器とは、北海道大学の構内から見つかった資料をもとに名付けられた、土器の型式名です。この土器は、2ないし3型式に分けられ、ある一定の時間幅をもつと考えられています。北海道や東北地方の一部では、縄文時代が終わった後も、縄文のついた土器が製作、使用されますが、この時代は続縄文文化（時代）と呼ばれ、北大式は、その最後に位置付けられています。この土器の特徴は、突瘤文（つきこぶもん）と呼ばれる独特の文様にあります。それは、土器の内面を指で押さえながら、棒状の工具で土器の外側から内側に向かって突き刺すことによって作り出されます。土器の内面に突き表れた瘤には、当時の人々の指紋が残ることもあります。

市子林遺跡から見つかった3点の破片には、ほぼ同じ大きさの突瘤文がみられます。写真1の破片には、突瘤文の他に小さい円形の刺突文が横に連なって巡り、胴部には縄文がつけられています。2・3の破片の下端には、横方向の沈線文がみられます。これらは、文様と器形にみられる特徴から、北大式のなかでも、より古い段階のものと思われる。

ところで、こうした北大式土器は、北海道以外のどこから見ついているのでしょうか。山形県と秋田県のごく一部の例を除くと、宮城県北部から下北

地方にかけての、太平洋側で多く見つかりました。ただし、遺跡全体の数の上では、まだ点としての分布でしかなく、まとめて出土した例もありません。

今回、市子林遺跡で見つかった北大式土器は、八戸市内では初めての出土です。また、5世紀頃の遺物が発見された、という意味でも貴重なものです。他の地域に目を向けると、五所川原市の隠川（11）遺跡では、古式土師器と呼ばれる古墳時代の初め頃の土器とともに、北大式のひとつ前の段階にあたる北海道系の土器が、同じ場所から見つかりました。また、天間林村の森ヶ沢遺跡では、近畿地方（陶邑）産とみられる須恵器と、東北南部の土師器、さらに北大式土器がひとつの墓坑からまとめて見つかりました。このような状況からみると、当時の様子は、続縄文文化という伝統を引き継ぎながら、古墳文化を取り入れつつ、それらが共存していた時代であったと想像されます。（小俣内 裕之）



今回、北大式土器はモノとして出土したが、遺構に伴わなかったため、その担い手の顔は全く見えていない。当時の人々は、北海道と関係を持ちながら、どのような文化を形成し生活を営んでいたのか、興味の尽きないところである。余談になるが、私が昨年試掘調査した盲堤沢遺跡で、後北C2・D式土器が出土した。今年度本調査を行う予定だが、必ずや遺構に伴い、且つまとめて出土することを願っている。



## 西長根遺跡（にしながね）

突然ですが問題です。右の写真の真ん中に、白っぽく見えるものはいったい何でしょう？

答えは骨です。イノシシの頭の骨です。西長根遺跡は、市内の十日市に広がる遺跡です。ここでは、本来土の中で分解されてしまうはずの動物の骨が見つかることがあります。今回は斎場のすぐ目の前を調査し、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡1棟、土坑2基を発見しました。イノシシの骨はその中の、縄文時代の土坑からシカの骨、マグロの骨と共に出てきました。

下の写真はその土坑の断面です。昔の人が掘った穴を土坑（どこう）と呼んでいます。その形は様々です。写真のものは、地表の入口から下に向かって広がっていく、いわゆるフラスコ形をしています。深さは約2mもあり、調査は上から崩れ落ちてくる土に注意しながら、ヘルメットをかぶって行いました。（藤谷一徳）



下の写真の矢印部分



土坑の断面（黒い部分）

## 八戸城跡（はちのへじょうあと）

八戸城の本丸跡は八戸の市街地の真ん中、内丸一丁目にあり、現在は三八城神社や三八城公園になっています。江戸時代に八戸藩の城が築かれたところとして知られ、町割りの起点となった場所でもあります。

地形的には馬淵川と新井田川がつくる沖積地に突き出た段丘の北端にあたります。三八城公園の北西の端に立つと、城下、売市、沼館地区はもちろん、高館の高台まで一望のもとに臨めます。空気の澄んだ日には、遠く八甲田の山々も見ることができます。

今年の発掘調査では、江戸時代の掘立柱建物跡や厚く土を盛って整地した跡が見つかりました。なかには1.3mも粘土や砂や灰を盛っている場所があり、大規模な土木工事をしていた様子がうかがえます。

また、江戸時代の遺構ばかりでなく、縄文時代や古代のものも見つかりました。

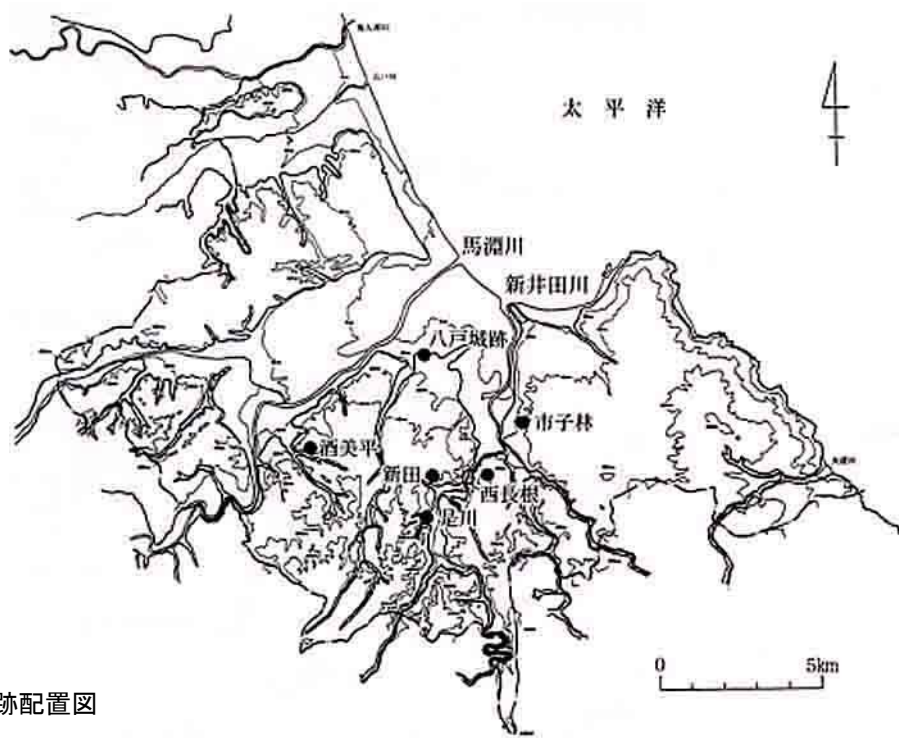
Tピットと呼ばれる細長く深い土坑は、シカ

やイノシシを捕らえるための縄文時代の落とし穴だと考えられています。このTピットが八戸城跡から見つかったことは、縄文の昔にはこの場所がシカやイノシシの通う、林や野原だったことを示しています。考えてみれば当然のことですが、八戸市街の中心部も縄文人の猟場だった時代があったわけです。

古代には竪穴住居や、幅2m以上、深さ1m以上もある深い大きな溝がつくられました。見晴らしの良いこの場所にどんな人達が住んだのか興味があるところです。

こうしてみると、八戸城があった場所は恵まれた地形を生かして、八戸地方に住んだ私達の祖先によって、縄文時代から現在までの間に何度も選ばれてきたことがわかります。三八城公園に行くことがあったら、そんなことも少し想像してみてもらえるとうれしいです。

（渡 則子）



遺跡配置図



## 新田（しんでん）遺跡—カマドに残された甕

新田遺跡は、八戸市の中心部から約3km南の丘陵地に位置します。遺跡は、標高90m前後の平坦面に広がり、現在は畑や宅地となっています。今回、この一角に住宅が立てられることになり、発掘調査を行ったところ、今から約1,400年ほど前（飛鳥時代）の竪穴住居跡がみつかりました。

竪穴住居は、平面形が、東西5.5m、南北5.4mのほぼ四角形で、この時代としては一般的な大きさです。床には焼け焦げた屋根材、焼土が多量に残っていたことから、火事にあった家と判断されました。北端の中央には、粘土で作られたカマドがあり、その中に今の土鍋にあたる甕が2個、横に並んで残されています。

調査を終え、甕を持ち帰って調べたところ、ひとつの甕の内側には炭化物とみられる黒っぽいヨゴレがみられ、もう一つには、炭化物は付いておらず、きれいなままでした。今までにカマドに掛けられた2個ずつの甕を八戸市内の資料でみていくと、新田遺跡と同様に、片方だけ炭化物や焦げ付きが残っている例が結構認められます。

竪穴住居跡からは、甑（こしき）と呼ばれる土器も出土しています。甑は、底に穴を開けた調理具で、お湯が沸いている甕の上に据えて、その蒸気で穀物を蒸すためのものです。甕と甑がこのような関係にあることから、内面に焦げ付きが見られない甕は、甑と組み合わせて米などを蒸す調理に使われ、焦げ付きのある甕は、この中に食物を入れ、煮炊きした場合などが考えられました。

調理をふたつに分けて行える二又コンロと同じようなカマドには、この時期の竪穴住居跡を発掘するとたびたび遭遇します。

（宇部 則保）



竪穴住居に残った土器・炭化材



カマドの中の甕（中央）



調査終了



調査風景